

高齢者の生活を応援するまちづくり

過疎化が進む鹿児島県霧島市にある社会福祉法人「山陵会」では、高齢者向け住宅「隠居長屋 ろんち」を設立した。24時間365日体制で対応する医療と日常生活を支える福祉が連携し、住み慣れた土地で介護が必要になっても、本人の意思が尊重される生活を提供するモデルケースとして期待されている。



地域の子どもたちと一緒に描いたウォールペイント。
ウッドデッキの木材は近隣住民の方からの寄付

介護施設と診療所の近くに 高齢者専用の住宅を設立

昭和初期から診療所を営み、地域の在宅医療に取り組んできた徳永医院が特別養護老人ホーム「フラワーホーム」を設立したのは昭和55年のことだ。以来、社会福祉法人「山陵会」として高齢者介護に関するサービスを総合的に整え、診療所での医療とともに地域の高齢者の健康を見守ってきた。

霧島市溝辺町は零細の農家が多く、高度成長期に若い世代が故郷を離れ、大都市へと移住していった。高齢となった親の世代の多くは単身もしくは夫婦世帯である。持ち家率は高いが、住宅の老朽化は進んでいる。過疎化も進んだため、隣近所との関係が希薄になる一方で介護サービスの非効率化も招いている。

医師であり、山陵会の理事長を務める徳永正義氏は、「ひとりで暮らすことの寂しさや不安が認知症やうつ病などの疾患の発生に大きく関連しています。しかし、高齢者の多くは、定員や費用の面で既存の老人福祉施設などに



社会福祉法人 山陵会
理事長
徳永正義氏

入れません。また、住み慣れたこの土地も離れたくない。残されているのは二人暮らしを続けながら在宅介護サービスを受ける道以外にありません」と語る。

新たな選択肢を提供したかった徳永氏は、高齢者向けのシェアハウス「ふもとの家」を立ち上げた。その経験のなかで、「医療と福祉のサービスが高齢者の暮らしを支えられれば、介護が必要な状態にあっても自分の家（部屋）で暮らすことができる」と確信し、高齢者専用の共同住宅を発案した。タイムシグよく国土交通省が「高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業」を募集していたので、社会福祉法人山陵会の事業として申請しモデル事業となった。こうして「隠居長屋 ろんち」は徳永医院の隣に建てられ、平成22年4月に開所した。介護保険のサービス施設も目と鼻の先にある。60歳以上で、要介護認定は最も重度の「5」までで入居可能とした。住宅数は10戸。L字型の建物で中間部分には食堂がある。部屋の広さは約15㎡から20㎡。家賃は収入に応じて決まるが最高でも2万5

000円。現在の入居者では1万円が一番多いという。

年齢・性別を問わず参加できる共生・協働の暮らし

ろんちは、住宅として個人のプライバシーをしっかり確保しつつ、地域交流スペースも設けている。住居棟の前には、「パーゴラ(表紙写真)」と呼ばれる大きな傘のような屋根があり、雨をしのげる場所にテーブルとベンチが置かれ、かまじやいろいろもある。

山陵会では、毎週土曜日に地域の集まりを開催。「たまり場」と名付けられたパーゴラの下で、地元旬の食材を使って、草餅、ちまき、月見団子、そば、味噌など季節の料理をみんなで作り、一緒に昼食を食べる。時には農作業をしたり、民謡を歌ったり、地域の子どもたちが参加して、一緒に山で食べられる野草を摘み、天ぷらを揚げることもある。年長者の知識や郷土の食文化を学び、暮らしの知恵を若い世代が教えてもらう機会でもある。

参加者のほとんどが高齢の一人暮らし。いつもはひとりで食事をしている人が多い。デイサービスなどでの口コミで、この集まりが広まり、参加するうちに仲良くなった。みな土曜日が来るの

が待ち遠しいという。ろんちの住人にとっても近所の人に来て、関わりが生まれる貴重な時間だ。

鹿児島空港からは近いもののバスなど公共交通が不便であり、夜間の見守り、低い家賃収入からの維持費の捻出など、課題もある。それでも徳永氏は「どんなに介護が必要になっても、自分の暮らしを自分で決められることはその人の人生にとって大事なことです。近隣・友人との関係を続けながらお互いに助け合ったり、少々、みんなが迷惑をかけあっても自立して暮らすことをあきらめない生き方を尊重したい」と語る。老人福祉施設ではなく、あくまで住宅である「隠居長屋ろんち」では、医療と福祉の連携で入居者の生活を支えるとともに、地域の人々、特に若い人達や子どもたちまでも巻き込んで、地域ケア体制の構築をめざしている。

鹿児島県霧島市の現状

霧島市の人口は12万7999人。市全体の高齢化率は22.4%。ろんちのある溝辺では23.2%だが、周辺には30%を超える地域もある(平成24年5月1日住民基本台帳人口)。また霧島市では高齢者のいる世帯のうち高齢者のみの世帯が約65%を占めた(平成22年国勢調査)。高齢者の孤立を防ぐ対策が急務となっている。

隠居長屋 んちの風景



三味線に合わせて民謡を唄い、踊る。伝統芸能は共通の話題。「ろんち」や「たまり場」は、地域の地名「論地」「玉利」に由来。



入居者の方の自室。家族との写真やろんちの住民に祝ってもらった誕生日の写真が飾られている。「先生(徳永医師)が近くにいる、みなさんが気にかけてくれるから安心です。寂しくなくていいですね」

畑でサツマイモの苗を植える。農作業や料理は、長年培ってきた技や知恵を披露する場でもある。収穫もまたイベントになり、ろんちを中心とした新たな近所づきあいも生まれていた。



食堂での食事風景。火曜と木曜にもランチ(200円)を提供しており、山陵会のスタッフや、ろんちの住人、近隣住民の方々が集う場となっている。



住宅は長屋形式。「今は隣の人の音や声で安心して暮らせています」玄関脇に椅子を置いたところ、ご近所同士のコミュニケーションが生まれた。